

(試し読み版)

異界に攫われて  
妖艶なお狐さまに  
婚前調教されて、  
帰れなくなりました

からあげのみこ

## 第一章

狐の婚礼に出くわしてはならぬ。  
見た者が気づかれれば、たちまち災いに巻き込まれる。

——ある地方の伝承より

＊ ＊ ＊

「天気雨だ」

濡れた前髪を払いつつ空を仰いだ。

燦々と陽光が降り注いでいるというのに、まるで空に穴が空いたかのように、きらきらと光の粒が地上へと舞い落ちてくる。

予報にはなかった天気雨。

大学の講義帰りにこんな目に遭うとは思わず、仕方なく古びたバス停の錆びた屋根の下へと駆け込んだ。

手持ち無沙汰なまま、スマートフォン画面を何度もなぞる。

(やまないかな……)

アスファルトを叩く雨音だけが、不自然なほど大きく響いていた。

その単調な音が、ふと遠ざかった気がした。

代わりに聞こえてきたのは、どこかで鳴らされる雅楽の調べ。凜とした笛の音と、厳かな太鼓の響き。現実にはそぐわない、幻想のような旋律。

顔を上げた瞬間、視界がすうっと翳る。

道の向こうから、ゆつくりとこちらへ向かってくる行列があっ

た。

先頭の男女は、豪奢な白無垢と黒紋付の羽織袴を身にまとい、  
いる。

こんな田舎道に、まるで時代を越えて現れたような光景。

その異様な行列に思わず目を奪われた。

だが、その瞳はすぐに、ある一点に釘付けになる。

花嫁の結い上げられた髪から、ぴんと張った金色の耳が覗いて  
いた。

そして花婿の袴からは、ふわりと揺れる金色の尻尾。

耳？ しっぽ？

瞬きをしたが、景色は変わらない。

行列に連なる人々の誰もが、艶やかな毛並みの耳と、豊かな尻  
尾を持っていた。

アクセサリーなどではない、それは——本物だった。

皮膚の一部のように自然で、滑らかで、あまりにもそこに在る。理解が追いつかない。

頭の中が真っ白になり、心臓がひどく速く脈打った。

あれは、人じゃない。

「——ひっ」

喉から引き攣った悲鳴が漏れた。

しまった、と思ったときにはもう遅かった。

ぴたり、と雅楽の音が途切れる。

行列にいた全員が、まるで操り人形のように一斉にこちらの方へと振り返った。

いくつもの、獣じみた金色の瞳が「異物」を正確に捉えている。見つかった。そう思った瞬間、背筋が氷水を浴びたように冷え

た。

金の瞳たちが、じりところらに歩を進めてくる。

逃げなきゃ——そう思うのに、足がすくんで動かない。

「……人の子か」

「どうする？」

「見てはならぬものを見たのだ。このままにはしておけまい」  
ひそひそと交わされるその声は、妙に静かで、それでいて酷く  
冷たかった。

もう、だめだ。

恐怖に目を閉じかけた、その刹那。

列の中から、一際目を引く存在が現れた。

白銀の髪が風にたなびき、夜を閉じ込めたような瑠璃色の瞳が、  
まっすぐ見据えてくる。

彼の姿を認めた瞬間、世界の音が止まった気がした。

肌を撫でる風すら、彼の前では静まり返る。

その青年は、ゆるやかに歩みを進め、戸惑いと恐怖に凍りついた腕を、ためらいなく取った。

その指先から伝わる体温が、妙に熱い。

彼は妖艶な笑みを浮かべ、列に並ぶ狐たちを見渡す。

その声は穏やかだった。

けれど、どこか命令のような重みを帯びていて、誰にも抗うことを許さない。

「この子は——私の婚約者のハナだ」

静まり返る空気を、言葉が凜と切り裂いた。

一瞬の沈黙ののち、列の中からざわめき上がる。

「……トモリ様？」

眩くような声が漏れる。

それでも彼——トモリは動じず、ゆっくりと続けた。

「今日の式には、正式な参列者として招いている。だから——邪魔を、するでない」

言い放たれたその言葉は、まるでこの世界の「掟」であるかのように響き渡った。

狐たちは目を伏せ、戸惑いを押し隠すように少しずつ視線を逸らしていく。

ただ呆然と、隣に立つ青年を見上げていた。

その横顔は、美しく、どこか冷たく、そして——得体の知れない安堵を抱かせるものだった。

「さあ、ハナ。こちらへ」

優しく、けれども有無を言わせぬ声音で呼ばれ、その手に導かれ



るまま、ふらりと行列の中へと歩み寄った。

意識はまだ追いつかない。

身体だけが、まるで夢の中のように彼の隣に立ち、ただその背に従って歩き出す。

——そこから、ぷつりと記憶が途切れた。

変な夢を見た。

狐の花嫁行列に参加する夢。

三三九度を見守って、祝宴にまで参加した。夢の中だからなのか、身体が思うように動かなくて意識も終始ぼんやりとしていた。本当に変な夢だった。

微睡みのなか誰かに、名前を呼ばれた気がした。

けれど、それが自分のものだとは何故か思えなかった。

どこか遠く、誰かのことを呼んでいるような、不思議な違和感が残る。

背中には、柔らかな布団の感触。

全身がぬるま湯に浸っているような、心地よくも頼りない感覚に包まれていた。

ぼんやりと目を開ける。

視界に映ったのは、古びた木の香りのする板張りの天井。

けれど、手入れが行き届いていて——まるで、古民家のように、ありながら新築のような、そんな矛盾した部屋だった。

「ああ……ハナ。やっと目覚めたか」

視界の端に、鮮やかな瑠璃色の瞳が覗いた。どこか懐かしくて、心を撫でるような声音。

そうだ。あのとき助けてくれた人だ。

「えっと……トモリ、さん……？」

口をついて出たその名が、自分の記憶とどう繋がっているのかもよくわからない。

けれど、その名だけは、どうしてか喉の奥に馴染んでいた。

そして、そのときようやく自分の格好に気付く。一糸まとわぬ、姿で布団に寝転んでいた。それも何故か乳房の先端はすでに果実のように鮮やかに紅く染まって、きゅっと上を向いている。

「——きやつ！」

思わず悲鳴を上げ、身を起こそうとしたが力が入らなかった。

「……いやっ！　なんで……こんな格好……っ」

力の入らない腕で肌を抱きしめた。

光を受けた肌が、てらてらと鈍く艶めいている。

身体が妙に温かく感じたのは、このせいだったのかもしれない。

「どうした、ハナ？」

その穏やかな声に、つい顔を向けてしまう。

視線の先にあったのは、トモリの手。

その指先も、同じように仄かに光を帯びていた。

「これか？　これは、ハナ。お前のための膏だよ」

微笑みながら、彼は言う。

その笑みには、あくまで自然な優しさが宿っていた。

けれど、どこか艶やかで、揺らぎを孕んだ色香が滲んでいる。

「生娘のための媚薬だ。身体の強ばりを解いて、恐怖を和らげてくれる。……その代わりに、少しだけ肌が——敏感になる」

ふう、と。彼が唇をすぼめて、肩にそつと息を吹きかけた。ひやりとした感触が、肌を撫でる。

「……っあ……♡」

思わず、ぴくり♡と肩を震わせ、身を振った。

火照った肌が、風に撫でられただけで疼く。

感覚が、明らかにおかしい。

「さあ、ハナ——俺に身を預けてくれ」

囁くようにそう言った彼の声は、どこまでも優しく、けれどその奥には、抗えない引力のようなものが潜んでいた。

身体を重ねられ、トモリの瑠璃色の瞳がすぐ目の前に迫る。

距離が近すぎて、呼吸の音さえ絡まりそうだった。

「ま、待ってください！」

反射的に声を上げると、彼の眉がわずかに動いた。

興ざめとでも言いたげに、その美しい顔が少しだけ強ばる。

「……どうした？」

低く、静かに——けれど、底知れない圧がにじむ声だった。

「わたし、ハナなんて名前じゃありません！　ひ、人違いです！」  
必死に訴える声が震える。

その言葉に、トモリは小さく、くすりと笑った。

「ふふ……そうか。じゃあ、お前の名前はなんという？」

意地悪でも、怒りでもない。

あくまで穏やかに問うその声音が、逆にぞっとするほど恐ろしい。

「わたし……わたしの名前は——」

口元まで出かかったはずの「何か」が、喉の奥でせき止められる。

言葉にならない。

思い出せない。

名前が、思い浮かばない。

頭の中で何かが霞んでいて、文字にさえならない。

何かを喉元まで引き上げているのに、声にする術が見つからない。

「……ほら、言えないじゃないか」

トモリは、静かにそう告げた。

「なら、お前はハナだ。俺の婚約者のハナ」

その声は、とても優しく、とても決定的だった。

「なにも恐れることはない。……ほら、力を抜いて」

その声音は、どうしようもなく甘く、優しく、拒絶するにはあまりに心地よすぎた。

顎をそつと掬われ、視線が持ち上がる。そして、唇が重なる。驚く間もなく、彼の口の中から、とろりと甘い何か流れ込ん

できた。

花蜜のような香り。

拒むことも吐き出すこともできなかった。トモリは唇を離してくれなかったから。

呼吸が、できない。

息が苦しいのに、逃げる術も、力もない。

どうにか飲み下すしかなかった。

喉が勝手に動いてしまう。

ようやく唇が離れた瞬間、ハナは耐えきれずに小さく息を吐いた。

「……ん、く……っ、はぁ……」

呼吸の仕方を忘れたように、途切れ途切れの吐息が漏れる。頬は火照り、目の奥がじんわり熱い。



そんな姿にトモリは少しだけ口元を歪めて、囁くように笑った。  
「……なんだ、口吸いも初めてか？」

ハナは何も言えず、ただ視線を逸らした。  
言葉にならない感情が喉元で渦を巻く。

否定もできず、肯定もできず。けれど、その沈黙が何よりも雄弁に、答えを語っていた。

「ふふ……そんなこと、気にせずともよい」

トモリの声は相変わらず穏やかで、まるで子供をあやすような優しさを含んでいた。

「俺がこれからすべて教えてやろう。可愛い、我が婚約者」

その言葉はどこまでも鷹揚で、やさしげで——けれど、その瞳に宿る瑠璃色の光は、ざらりと熱を孕んでいた。

やわらかく微笑むその表情の奥に「誰にも触れさせぬ」という、

強烈な独占欲が隠しきれずに揺らいでいた。

「……や、やめてください——っ、ひゃん♡」

言いかけた言葉は、次の瞬間、喉奥に押し込まれる。

トモリの指先がつうと鎖骨をなぞっただけで、ハナの身体はびくりと仰け反り、足指がきゅっと丸まった。

身体が熱い。

まるで微睡みの中にいるように、頭がぼんやりとして、思考が霞んでいく。

相変わらず力が入らない。けれど、だるさは不思議とない。代わりにふわりとした心地よさが、全身を包み込んでいた。

そのとき、再びトモリの指先が肌に触れた。

今度は、胸元。谷間の薄く繊細な皮膚を、くすぐるように優しくなぞってくる。

「……あっ♡あぁん♡♡」

甘い声が、ふいに零れた。

それが自分の喉から漏れたものだ気づいたのは、数瞬遅れてからだった。

息が詰まり、顔がかつと熱を持つ。

けれど、すでにその声は、彼の耳に届いていた。

「あまり強い霊薬は使いたくなかったんだ。よかった、あれで効いてきたようだな」

トモリは、どこか愛おしそうに微笑んだ。

「や、やだ……わたし、おかしっ……」

声を震わせながら、ハナは目元に涙を滲ませた。熱く、視界が揺れる。

自分の身体が、知らない誰かのものみたいに反応していくこと

が、怖くて、恥ずかしくて、なにより戸惑いでいっぱいだった。  
それでも、トモリの声はやわらかく、揺るがない。

「拒まず、受け入れておくれ」

まるで「そうするのが当然」だとも言うように。

膏のぬめりを借りて手のひらでハナの脇腹——肋骨の浮き上がった線を、優しくなぞり上げていく。

その動きはあまりに繊細で、まるで細い筆で肌を撫でられているようだった。

「——っああっ♡♡」

その刺激に、ハナの喉から甲高い声が漏れた。

追い討ちのように、乳房を両手で包み込むように掴まれ、優しくも逃れられぬ力で揉まれ、弄ばれる。

「ん♡……あっ♡♡」

敏感になっていたその乳首を、指先が軽く弾いた。そのたびにハナの身体はびくと跳ね、思わず腰が浮いてしまう。

しばらくその反応を楽しむように、指の動きは緩急をつけながら続いた。

そして——ふいに、その柔らかな頂を口に含まれた。

「やっ……！」

甘噛みのぴりりとした刺激が走る。

少しだけ、強く。からく、痛いような。けれど、それが余計に熱を呼び、涙がぼろりと頬を伝う。

今度は舌で熱を帯びたねっとりとした舐め方で、そこを優しくあやすようになぞった。

ハナの身体は熱に浮かされて、もう言葉もろくに出せないほどだった。肌は膏と汗でぬらぬらと艶めき、髪は額に貼りついてい

る。

それなのにトモリはいまだ着物の襟すら崩さず、帯に指ひとつかけていない。

まるで何もしていないかのような顔で、ハナをここまで蕩めかせている。

「……薬を使ったとはいえこんなに敏いとは、思わなかった」

そう言つて薄く笑うその声も、息ひとつ乱れていない。ハナはそれが余計に悔しくて、恥ずかしくてたまらない。

「やだぁ……♡もう、身体……へん♡なのに……♡」

訴える声に返るのは嬉しそうな声。

「そうか、そうか……もっと、よくなろう」

トモリの手が、今度は内腿をやさしくなぞる。熱を持った肌に、指先が走るたび、そこからふつつつと新しい熱が湧き上がった。

秘裂を撫であげられくちゅ♡と水音が鳴る。

「膣内にも膏を塗り込んでおいたからな」

声が、耳の奥に甘く響く。

自分さえ、ほとんど触れたことのない場所だというのに、トモリはもうその感触を知っていた。

おそろしいのは、そのことに、自分がそれほど動揺していないことだった。

「ああ♡……も、もう♡」

身体の奥からせり上がる熱に、抗うことができない。力の入らない脚は、だらしなく、蛙のように開いたまま。まるでなにかを待つように、期待してしまっている。

「素直になってきたな。肉芽もこんなに膨らませて、愛らしい」  
愛液と膏をまとった指で陰核を撫でられ、強すぎる刺激に身体

をのけぞらせる。

「ひゃああんっ~~~~~♡♡」

まだ腹をぴくぴく♡と痙攣させ喘ぐ息をするハナを恍惚とした表情で眺める。トモリはすつと自身の胸に手を伸ばした。

指先が、その襟元をほどく。結び目が緩んで、重ねた衣が音もなく滑り落ちる。

ハナが息を呑んだ瞬間、トモリはゆつくりと舌で唇をなぞった。その仕草はいやらしいというより、これから獲物に舌を這わせる捕食者のよう。背筋が震えるほど、ぞっとするほどに美しかった。

ハナは思わず息を呑み、そのままぼつりと眩いた。

「……きれい」

陶然としたその声に、トモリはどこか困ったように、けれど嬉



しげに微笑んだ。

「そんな顔で見つめられたら、照れてしまうな」

そう言って、ふわりとハナを抱き寄せる。

そして今度は、耳元で優しく囁いた。

「可愛いよ、ハナ」

その声音は、まるで今この世界にあるすべての愛情を、たったひとつの名に込めたようだった。

「——あ♡」

トモリのモノが濡れた花びらの奥に宛てがわれる。

「ああ……もう熱いな。俺のものになる準備ができている」

「……っ、そんな♡……こと……っ♡」

頭が追いつかない。

でも身体が、言葉に反応して疼くのがわかる。

「やだ♡……なんで♡……こんな、のに……♡」  
でももう、拒むための言葉は出てこなかった。

「力を抜いて、ゆっくり息を吐くんだ」

ハナの顎にそっと添えられた指先が、まるで赤子をあやすように、優しく動く。

その声に従おうとするたび、胸の奥の緊張が、少しずつ溶けていく。

息を吐くたびに、身体はトモリに近づいてしまう。

意識が、境界を越えて、瑠璃色の世界に吸い込まれていくようだった。

「——っふう♡♡♡」

痛みはほとんどなかった。

それどころか早速きゆうきゆう♡とはしたなく締め付けてい

るのが自分でもわかる。

「ああ♡やっ、なか♡こすこす♡しちや、だめえ♡♡」

膣壁を擦りあげながら、ゆっくり奥へとせり上がってくる。膣内をぴったり♡その形に変えられて蹂躪されているというのに、甘い声しか零れない。

「ああ、ハナ。お前の膣内は熱くて、とても具合がいいよ」  
熱を帯びた声音が、耳奥に直接ふれてくるようだった。

トモリの瞳がゆっくりと細められ、ハナを包む空気そのものが、ねっとり甘く変わっていく。

指先が頬をなぞる。

それだけで、ハナの喉から小さく声が漏れた。

「……もっと感じて。可愛い声を、聞かせて」

「ああ♡♡うう……♡♡♡」

トモリの囁きは優しく、けれどどうしようもなく深く——身体  
の最奥を、確かに貫いてきた。

「ハナ、俺の名を呼んでくれ」

トモリの声は、低く甘く、喉の奥を這うように響いた。

ハナは潤んだ目で見上げ、身体を揺さぶられながら口を震わせる。

「あっ♡と……トモリ、さん……♡」

その声に、目を細めて微笑んだ。

「もう一度」

「ああ♡♡トモリさん♡」

「もっと甘く。お前の声で、俺を満たしてくれ」

ハナの胸が震える。

どこかおかしくなってしまうそうなのに、息を吸い、吐くたび、

口が彼の名を紡ぐ。

「トモリ、さん……っ♡ん、あう♡トモリ……さん……♡♡あ、ああっ♡♡」

呼ぶたびに熱が上がる。

名を呼ぶたびに、身体が歓びを覚えていく。

それが快感なのか、幸福なのか、もうわからない。

ただ、満たされていく。昇りつめていく。

トモリの呼吸がわずかに乱れる。

「……もう、限界だ」

熱を孕んだ声で囁き、目を伏せる。

「あっ♡あう♡トモリ、さあん♡♡」

わけもわからないまま、ハナは震える指先をそっと差し出した。力が入らない手のひらは、頼るように宙を彷徨う。

トモリはその手を見逃さなかった。優しく、しかし決して離さぬように自らの指を絡め、敷布の上へ縫い付けるように押しつけた。

「――ハナ、受け止めてくれ」

いつそう深く突き上げるように穿たれた。膣道の中でびゅっ♡びゅるる♡びゅうう♡と熱いモノが吐き出される。

「あっ♡あっつい♡♡きてりゅ~~~~♡♡♡」

役目を終えたモノがずるりと引き抜かれた感覚にハナから上擦った声が漏れた。かぱつと無防備に開いたままの脚の中心からはとろとろと白濁した液が零れ出ている。

トモリは指で精を掬うとそれをハナの膣内に戻した。

「ああ……♡」

まだ余韻の中で微睡むようなハナの額にトモリは静かに自分

の額をそつと重ねた。

ただ、呼吸を合わせるように、ゆっくりと目を閉じ、言葉なくその瞬間に浸っていた。